

〈一般投稿論文〉 [研究論文]

## 談話標識 *okay* の機能的意味 — 関連性理論の視点から —<sup>\*,1</sup>

西川 真由美  
摂南大学

This paper discusses the functions of the discourse marker (henceforth DM) *okay* in contemporary American English conversation. The DM *okay* is used not only to indicate the speaker's approval toward other people's message but also to introduce disagreements, change topics, start or close conversations and encourage themselves. The aim of this paper is to explore, in the framework of relevance theory, the cognitive function of the DM *okay* in the interpretation of the utterances following this marker. I will demonstrate that the DM *okay* encodes both a conceptual meaning of "approval" towards some requests for actions accessible to the speakers from the contexts, and a procedural meaning; i.e., it guides the hearer to interpret the utterance following the DM *okay* as communicating some speech acts which the hearer may not expect/anticipate prior to the utterance.

キーワード： 談話標識、関連性理論、概念的意味、手続き的意味

### 1. はじめに

今やほぼ世界中の言語で使用され、広く「是認 (approval)」の意を持つ *okay* は、単独で用いられるだけでなく、くだけた会話のさまざまな談話の節目に使用され、会話を促進させる働きを持つ (OALD9、LDOCE6 他)。このような *okay* はしばしば標識 (marker) とみなされ、Jucker (1998:174) は他の話し手によって与えられた情報への応答を合図するための受信標識 (reception marker)、Biber et al. (1999:1090) は命令、示唆、提示、忠告、許可のような未来の行動に関するさまざまな発話行為に対して日常的な是認の応答として機能する応答形式 (response form) と呼んでいる。つまり、標識の *okay* は、(1)-

---

\* 本稿は、日本語用論学会第16回大会(2013年12月、於慶應義塾大学)において発表し西川(2013)としてまとめた内容を加筆・修正したものである。修正にあたり御指導いただいた滝浦真人先生をはじめ査読委員の先生方に心から感謝申し上げたい。

<sup>1</sup> *okay* は *OK*, *okey* とともに綴られるが、本稿ではいずれの形も同様に扱うこととする。

(4) のように相手の発話を受けてその内容に対する是認を表す応答だと考えられているのである (西川 2013 他)。

- (1) Erin: Hey, get in the house. No dripping.  
Kids: **Okay**. (Movie: *Erin Brockovich*)
- (2) Kate: Dinner's ready.  
Zoe: **Okay**. (Movie: *No Reservations*)
- (3) Tess: Um, here. Please say this and only this. 'Cause we don't want to be embarrassed again.  
Jane: **Okay**. You got it. (Movie: *27 Dresses*)
- (4) Julian: [. . .] Can you meet me at the Grill at eight?  
Erica: **Okay**. Yes. That seems fine. (Movie: *Something's Gotta Give*)

一方で、後続発話を伴う標識 *okay* の中には、単に先行発話に対する是認の応答という枠では説明できない下記のような例が観察される。

- (5) Harry: My dear, you are confusing sex with sleeping. Sleeping is something I prefer to do alone.  
Erica: **Okay**, good to know. (Movie: *Something's Gotta Give*)
- (6) Jane: About your hair ...  
Casey: What? The bitch said, "Up." It's up.  
Jane: **Okay**. I'll fix it inside. (Movie: *27 Dresses*)
- (7) Jane: Thanks. Thirty-one Water Street. Brooklyn. **Okay**. I will give you three hundred dollars flat for the whole night on one condition. (ibid.)
- (8) [Erin shuts the door.]  
Erin: **Okay**, I'll just be as quick as I can, right? Matthew, can you watch your sister? (Movie: *Erin Brockovich*)
- (9) Miranda: And I would like my steak here ... in 15 minutes.  
Andy: No problem. **Okay**. I have four hours to get the impossible manuscript. Smith and Wollensky's doesn't open until 11:30. How am I gonna get the steak? **Okay**. I will be back in 15 minutes. Wish me luck. (Movie: *The Devil Wears Prada*)

(5) は、「(自分の部屋に戻って) 一人で眠りたい」というハリーに対して、エリカが不満げに返事をする場面である。ハリーの言い分にエリカが十分に納得しているとは言い難い状況で *okay* が使用されている。(6) は、ブライドメイドを務めることになっているジェーンとケイシーが結婚式に向かう場面である。ジェーンに髪形の不備を指摘され「アップに

しろと言われたからアップにただけよ」と苛立つケイシーに対して、エリンが *okay* を使ってケイシーの気持ちを一旦落ち着かせてから、「中で直してあげるわ」と述べている。(7) は、タクシーに乗ったジェーンが行き先を運転手に伝えた後、「このタクシーを一晩300ドルで貸し切りたい」と交渉に移る場面である。*okay* で話題転換のタイミングが整ったことを合図することで、スムーズに交渉の話題に移行させている。(8) は、エリンが3人の子供を連れて職場の法律事務所に入ろうとする場面である。ここでは、*okay* は相手に対する応答ではなく、会話の切り出しに用いて子供たちの注意を引き、後に続く依頼の導入にスムーズにつなげている。(9) では、自分の失敗のせいで上司のミランダから無理難題を言いつけられたアンディが、自らを励まししながら命令を全うしようと奮起する場面で *okay* を使っている。これらの例に見られる *okay* は、相手の発話に対する是認の応答というよりも、むしろ後に続く会話の展開や発話行為の遂行に大きく関わっているように思える。また、このような形で用いられる *okay* は、何かへの応答のように感じられる一方で、単なる是認の応答には無い以下のような特徴を有していると考えられる(西川 2013: 122)。

- ① 必ずしも完全な是認(理解・承諾)を表していない。
- ② 会話の流れを一旦遮断し、新たな展開につなげている。
- ③ 相手の発話が無い状況でも使用される。
- ④ 後続発話で示される行為に対して起動性を持ち、会話において次の展開への強い弾みとなっている。

本稿では、①～④のような特徴を持ち、相手の発話に対する是認の応答というよりも使用文脈の中で話し手が認識した情報を後続発話の解釈における聞き手の推論プロセスにつなげるために用いられる *okay* を談話標識(以下 DM と称す) *okay* とみなす(Biber 1999:1086; Swan 2016: 301; 西川 *ibid.*)。<sup>2</sup> その上で、英語映画の台詞の中で使用されている DM *okay* のさまざまな事例を分析し、発話解釈という認知行動におけるヒトの推論メカニズムを扱う認知語用論である関連性理論(relevance theory)の枠組みで、現代アメリカ英語で使用される DM *okay* の談話機能を考察する。<sup>3</sup> そして、DM *okay* が関与す

<sup>2</sup> 談話標識という用語は統一された定義を持たないが、本稿では、Schourup (1999: 230-234) で示された特徴(connectivity, optionality, non-truth-conditionality, weak clause association, initiality, orality, multi-categoriality)のいくつかを有し、「発話解釈において聞き手の推論プロセスに何らかの制約を課すことによって関連する主発話を話し手の意図した方向で解釈させるように仕向ける表現」という定義のもとに、DM という語を使用する。

<sup>3</sup> 関連性理論とは、Griceの発話解釈の推論モデルをさらに発展させ、「話し手は最適の関連性(optimal relevance)を持つ発話をし、聞き手はそういった想定の下に発話解釈を行う」という前提のもと、伝達と発話意図の復元に関与する推論プロセスの説明を目的とするモデルである。ある発

る意味論的側面と語用論的側面を明らかにすることにより、談話内で見られる多様な DM *okay* の用法に関して統一した説明が可能であることを示す。

## 2. 先行研究

本節では、応答として機能する *okay* に関する3つの先行研究を概説し、その問題点を指摘する。まず、Merritt (1984: 144) は、接客 (service encounter) の場面で使用される *okay* を分析し、2つの機能を持つと主張している。1つは是認 (approval)、容認 (acceptance) や承認 (confirmation) を表すこと、もう1つは店頭での接客のやり取りにおける2つの (動作の) 段階をつなぐ橋渡しの役割をになっていることである。例えば、ネックレスを見ていた客が “Can you show me something else in that price range?” と頼み、店員がペンダントを見せた後、客が “OK. I’ll take these two.” と述べた際、客はただすすめられた商品への是認を表すだけでなく、調べてくれたことに対する満足や、さらに次の動作 (購入) への準備をも表しているというのである。言い換えれば、*okay* は接客における接近 (access)、選択 (selection)、決心 (decision)、(金銭と商品の) 交換 (exchange)、締めくくり (closure) という5つ段階において、ある段階から次の段階に移行するための合図としての役も担っていると主張している (ibid.)。

次に、Beach (1993) は、会話の中で観察されるさまざまな *okay* の使用に関し、その前後の発話内容や行為との関連も視野に入れ詳細に分析している。その上で、*okay* は、①先行発話の内容や状況に対する是認、容認、理解などを表す応答、②次の動きへの準備ができている状態 (state of readiness)、という2つの機能を持つと主張している (Beach 1993: 328-329)。

内田 (1985) では、隣接句に現れる談話辞 (discourse particle) の *okay* は「満足だ」、「元気だ」等の辞書的な意味に加えて、要請、要求、主張、忠告等の発話行為に対する好ましい (preferred) 応答として第2句目に生じ、是認 (approbation) を表すとしている。そして、*okay* には①隣接句の第1句目の発話行為の是認 (要請、要求、主張、忠告に対する好ましい応答)、②先行する談話の集約 (話のまとめ、結論の導入など)、③ Initiation の冒頭に用いられ話題の転換、の3つの用法があると述べている。

---

話が関連性を有するとは、それを解釈することによってヒトの認知環境が修正される、つまり認知効果 (cognitive effect) を持つことである。認知効果には、①新しい想定が付加、②既存想定強化、③既存想定に矛盾する想定を削除、という3つが設定されている。そして、関連性の程度は、発話解釈に必要な処理努力 (cognitive effort) と発話から得られる認知効果のバランスによって決まる。努力が一定であれば認知効果の多い発話の方が関連性が高く、認知効果が一定であれば処理努力の少ない発話の方が関連性は高くなる (Sperber & Wilson 1986/1995: 108-37 参照)。

これらの先行研究はいずれも、後続発話を伴う *okay* が何らかの是認の応答であること、そして文脈の中で前後の情報を関連づけ、話し手が次の動きを取るための準備をするという機能を持つことを示している。これについては前節で見てきたさまざまな事例が示す通り納得できるものである。しかしながら、いくつかの問題があると考えられる。第1に、*okay* が相手の発話への応答であることを前提としたこれらの分析では、(7) のように自らのターンの中で話題を転換したり、(8) のように会話を開始したり、(9) のように自己奮起する際に用いられる DM *okay* の用法を説明することができない。これらはいずれも相手の発話が無い状況で使用されるからである。第2に、*okay* が是認を表す応答であるとするこれらの分析では、なぜ *okay* が3.2の(11)や(12)のように反論を表す発話行為と共起するのかを説明できない。*okay* が単に是認を表すのであれば、当然反論の導入は矛盾を引き起こさずである。また、(5)に見られるように *okay* は常に100%の是認を表しているわけではない。*okay* が伝える是認の程度は実にさまざまであることについても何も言及されていないのである。第3に、Merritt や Beach が主張している「次のステップへの準備」は *okay* のどこから出て来るのかが説明されていない。確かに *okay* は後続発話で展開される次のステップへの大きな起動力を持っているが、この機能が是認の応答であることとどう関係するのかについて何も説明されていないのである。本考察では、関連性理論の認知と伝達の観点から、DM *okay* に意味論的に記号化された意味と、それを使用することで文脈内で語用論的に導出される意味を明らかにすることによりこれらの問題の解明を試みる。

### 3. DM *okay* の事例

本節では、会話の中で特に頻繁に観察される DM *okay* の用法について、事例をあげながら、話し手は *okay* を使用することによって後続する主発話における聞き手の解釈にどのような影響を与えようとしているのかを詳細に分析する。

#### 3.1. 不承不承の同意

DM *okay* は、相手の発話を受けその内容に対して全く賛同できない中で最後にしぶしぶ受け入れる場面で用いられる。(10)を見てみる。

- (10) Zoe: You forgot me.  
 Kate: It's not what you think.  
 Zoe: You forgot me.  
 Kate: Leah had her baby. I had to take her to the hospital.  
 Zoe: But you still forgot me.

Kate: **Okay**, I forgot you. And I'm sorry. (Movie: *No Reservation 5*)

(10) は、ケイトが仕事の都合でゾーイを学校へ迎えに行くのを忘れ、待ちくたびれたゾーイが腹を立てている場面である。「私のことを忘れていた」と繰り返すゾーイに対して、ケイトは「そうじゃない（職場でトラブルがあって来れなかっただけだ）」と言いつつ聞きながら、結局最後には謝罪する。ここではゾーイの言い分に対しては全く納得していないけれど、長いこと一人で待たされた淋しさと怒りを必死で伝えようとするゾーイの思いに一定の理解を示し、平行線が続く会話の流れを終わらせ、妥協案がうまく受け入れられるように DM *okay* が使用されていると考えられる。

### 3.2. 反論の導入

(11) (12) のように、相手の主張に対して反論する時にも *okay* が使用される。

(11) Christian: You're ... You're a vision. Thank God I saved your job.

Andy: **Okay**. You know, I figured out a few things on my own too. Turns out, I'm not as nice as you thought.

(Movie: *The Devil Wears Prada*)

(12) Christian: She's a notorious sadist. And not ... not in a good way.

Andy: **Okay**, she's tough. But if Miranda were a man ... no one would notice anything about her except how great she is at her job.

(ibid.)

(11) は、「君の仕事の危機を救ってやった」と恩着せがましく言うクリスチャンに対して、アンディが「自分でも努力はした」と言い返す場面である。(12) は、「彼女（上司のミランダ）はひどいサディストだ」と言うクリスチャンに対して、アンディが「なるほど彼女は厳しい。でももし彼女が男だったらそんな批判はされないだろう」と反論する場面である。いずれの場合も、相手に異を唱える前に「あなたの言いたいことはわかった」と（相手の発話の命題内容には賛成できないが）相手の思いに対して一定の理解を示すために *okay* が使用されている。<sup>4</sup> それにより、相手が心理的にスムーズに反論の解釈に入るよう促す効果を期待しているのである。同時に、反論という行為から導出される失礼な響きを軽減するための配慮表現としての役割も果たしていると考えられる。

<sup>4</sup> 反論の際には *but* が共起することが頻繁にある。それは、*okay* は基本的に受け取った情報に対する是認の応答であるので、後に続く反論の解釈にスムーズに導くためには *okay* によって伝達される肯定的なニュアンスを一旦削除するとともに、そのことを聞き手に明示しておく必要があるからだと考えられる。(12) のように *okay* と *but* の間には一旦相手の言い分を支持する内容の発話を挟むこともある。

### 3.3. 質問や依頼の導入

DM *okay* は相手の発話を受け、それに関してさらに質問や依頼をする直前にも頻繁に用いられる。(13) では、「論文の執筆をあきらめるべきではない」と言うラリーに対して、レベッカがその理由をたずねている。(14) は、妹の結婚式のために 3 週間で最高に素晴らしいウェディングケーキを作ってくれるよう頼むジェーンに対して、菓子職人のアントワンが「無理だ」と断る場面である。ジェーンは *okay* を使って一旦彼の拒絶を受け入れた後、過去にも同じように忙しい状況で見事にケーキを作ってくれたことを持ち出し、やんわりと頼み直している。

(13) Larry: Hey. Listen, I don't, I don't think you should give up on your paper.

Rebecca: *Okay*. Why? (Movie: *The Night Museum*)

(14) Antoine: Three weeks? It cannot be done. It is not enough time for one of my creations!

Jane: *Okay*, um ... Antoine, remember when I brought you the Schecters and they commissioned that six-tiered, heart-shaped masterpiece? (Movie: *27 Dresses*)

ここでも、相手の発話内容そのものについては納得していないが、相手の発話意図に関しての一定の理解を伝えている。つまり、質問や依頼など相手に負担をかけるような発話行為を導入する前に、*okay* を使い一応の理解を示しておくことで、後に続く自分の質問や依頼が相手に快く受け入れられ、答えてもらいやすい状況を作っているのである。また、*okay* が無いと非常にぶっきらぼうに響くことから一種のポライトネスストラテジー (politeness strategy) としての効果も果たしていると考えられる。

### 3.4. 話題転換

話題転換をする際にも *okay* は頻繁に用いられる (Swan 2016: 301 他)。<sup>5</sup> (15) では、

<sup>5</sup> Schegloff and Sacks (1973) では、電話の会話の中で *OK* は本論から結論へと移行する際 Pre-closing として使用されるとしている (Aijmer 2002: 42 から引用)。話題転換の節目で用いられる *okay* は、下記の (i) (ii) のように、頻繁に *now* や *so* と共起する。これは *okay* 自体が話題転換そのものを合図するのではなく、単にそうした行為への自らの要求に対する応答にすぎないからである。共起する際はいずれも *okay* が先行することで話題を変えるという自らの意志をまず示し、その後どのような方法で話題転換を行うのかを *now* と *so* が示すのだと考えられる。

(i) Julian: She's pretty major. (writing a prescription) So, you date her daughter?  
Harry: *Okay*, now she's a great chick. Must take after the father. Which reminds me [...]. (Movie: *Something's Gotta Give*)

相手の発話への応答ではなく、「さて」と、リリーがもともと導入しようと考えていた話題を持ち出すタイミングで *DM okay* が使用されている。ここでは、一連の挨拶が終わったタイミングで展示の方法と鑑賞する順番を説明する必要性を感じたリリーが、「今その話題に変えたらどうか」という自らの心内の声に対して応答していると考えられる。そして、「よし、そうしよう」と *okay* を発することで、話し手自身が話題を変える準備ができたことを表明し、ひいては注意を促すことで聞き手がスムーズに新しい話題の解釈に入れるように準備をさせているのである。

(15) Andy: Hey. This show is amazing. I am so proud of you.

Lily: Thank you. *Okay*, start with the photos in the back and work your way forward. That is the way I designed it, and it is brilliant. You will love it. (Movie: *The Devil Wears Prada*)

### 3.5. 自己奮起

*DM okay* は、気が進まないことを強られる状況で、後続発話で示される次の行動へと自らを奮い立たせるためにも使用される。(16) を見てみる。

(16) Erica: Wait, wait, wait, wait. You're leaving, Zoe's leaving, the entourage is leaving. And I'm gonna be stuck here with him alone?

Marin: The hospital's sending over a nurse in the morning.

Erica: The morning? That's nineteen hours from now ... (takes a deep breath) *Okay*, I can handle this. I'm just getting myself into a zen place, play music, cook, write, focus ....

(Movie: *Something's Gotta Give*)

(16) は、突然心臓発作で倒れた娘のボーイフレンドを一晩世話をするはめになったエリカが、「よし、頑張ろう」と自分に言い聞かせる場面である。「よし(わかった)」と、今置かれている苦境とその中でなすべきことを無理やり自分が理解・承諾したことを *okay* で

---

(ii) William: I also have a phone. I'm confident that in five minutes we can have your spick and span and back on the street again ... in the non-prostitute sense obviously.

Anna: *Okay*. So what does 'just over the street' mean ... give it to me in yards.

(Movie: *Notting Hill*)

話題転換の節目で典型的に用いられる *by the way* とは共起しない。*okay* は既に話し手の頭の中にあった話題導入の要請に応じる合図である。他方、*by the way* は突然の思いつきで本論から逸脱する際に用いられる表現なので、基本的に相いれないからだと考えられる (Schourup & Waida 1987: 52-63; 松尾; 廣瀬; 西川 2015: 135)。

自らに言い聞かせ、まだまだ言い足りない愚痴を封じると同時にその後自分の決意を述べている。またそうすることで自らに気合を入れ、次の行動への大きな起動力を生み出していると考えられる。

### 3.6. 会話の切り出しと終了

DM *okay* は、(17) (18) のように、それぞれ会話を開始したり終了したりするきっかけとしてもよく使われる。

(17) Emily: **Okay**. First of all, you and I answer the phones. The phone must be answered every single time it rings. (Movie: *The Devil Wears Prada*)

(18) Erica: [holding the water glass] Where should I do this? It's an empty water glass. What are the choices?

Dave: **Okay**. [rises] I'm getting' out of your hair.

(Movie: *Something's Gotta Give*)

(17) は、新入社員のアンディに仕事の説明をするタイミングを見計らっていた先輩のエミリーが沈黙を破り、やっとその状況が整ったこと、またエミリーの心の中でその準備ができたことを示すために *okay* を用いている。さらに、そうすることで相手の注意を喚起し、聞き手がこれから始まる会話の解釈にスムーズに入れるようにしているのだと考えられる。(18) は、使い終わったグラスを洗おうともせず渡した若い女性をエリカが非難するのを聞いたデイブが、「そろそろ失礼するよ」と会話を閉じようとする場面である。ここでも、会話を切り上げる頃合いを見計らっていたデイブが発話状況から「今だ」と察し、まだ話を続けようとするエリカを遮ると同時に、心の中でその準備が完了したことを示すために *okay* を使用している。また、会話を切り上げる前に一応相手の発話内容や思いへの理解を示しておくことで、会話から抜けるという失礼さを少しでも軽減し、またそうすることでスムーズに暇乞いをするために *okay* が使用されていると考えられる。さらに、話し手の心の中で会話を切り上げる準備が完了したことも合図し、次の行動への強い起動力ともなっている。

以上から次のことがわかる。まず、相手の発話を受けて用いられる DM *okay* は、相手の発話の命題内容そのものではなく、伝達される発話意図に対してのさまざまな程度の理解と承諾を示す応答詞として機能している。2つ目に、DM *okay* は相手の発話が無い状況でも使用され、発話状況から話し手自身が認識した次なる行動への必要性、あるいは話し手の心内に生まれた何らかの行動要請に対して「よしわかった、そうしよう」という是認を伝えている。3つ目に、(11) (12) のような反論や (13) (14) のような更なる質問や依頼のような相手に負担を強いる行為を導入する場面では、*okay* で相手の発話意図に対して一定の(時に形だけの)理解を示しておくことで、相手に対する配慮を表している。

そうすることで、後続発話の内容が相手に受け入れられやすい状況を作り出そうとしているのだと考えられる。このように、さまざまな談話の節目に生起する DM *okay* は、話し手がその時点で認識した情報に対するさまざまな程度の肯定的な応答として機能すると同時に、その後で自分が導入する発話を通してのやりとりがスムーズに行われるための環境を整備するために使用されているのである。

#### 4. DM *okay* の機能

前節では、DM *okay* は常に相手の発話意図、あるいは発話状況からの必要性や要請に対するさまざまな程度の是認の応答であること、また後続発話の解釈が話し手の意図に沿った方向で行われるための環境整備の役割を果たしていることを見た。DM *okay* が持つこのような機能は使用文脈に関わらず常に存在することから、DM *okay* という言語項目に意味論的に記号化されているものと考えられる。一方で、起動性やボライトネスは文脈によって伝えられる時と伝えられない時があることから、発話内容と使用文脈におけるさまざまな文脈情報から語用論的に導出される機能的意味と考えられる。本節では、まず、DM *okay* に記号化された意味を関連性理論の概念的意味 (conceptual meaning) と手続き的意味 (procedural meaning) という枠組みで分析し、それぞれの意味の特定を試みる。その上で、他の語用論的な意味の導出に関わるメカニズムを明らかにする。

##### 4.1. DM *okay* の意味論

関連性理論は独自の意味論を展開し、ある言語項目に記号化される意味として概念的意味と手続き的意味の2種類を設定している。前者は心内に表示される概念表示の構成要素であり発話解釈の推論プロセスにおいて操作を受ける概念に関する意味を、後者は概念操作そのものに関わる意味を持つ (Wilson & Sperber 1993: 10 参照)。本節では、DM *okay* は両方の意味を記号化することにより発話解釈の推論プロセスに貢献していることを論じる。

###### 4.1.1. 概念的意味

まず、DM *okay* は「是認」という概念的意味を記号化していると考えられる。その理由は、それ自体真理条件を有していること、またそのことにより否定・矛盾といった論理的関係を持つからである。<sup>6</sup> 例えば、(10) (11) (12) のような不承不承の同意や反論、(13) (14) のさらなる質問や依頼のような例において、話し手は DM *okay* で「わかった」という理

---

<sup>6</sup> 概念的意味の条件について、Wilson & Sperber (1993: 10) では、論理的特性と真理条件的特性の2つを挙げている。

解を伝えているが、“No, it’s not true.”と返すことは可能であり、このことは *okay* 自体が自らの命題の真理条件を有することを示している。また、“No, you don’t understand.”のように否定することも可能なことから論理的関係に関与し、従って概念を伝えていることを示している。一方で、話題転換や自己奮起、会話の切り出しや終了など相手の発話が存在しない場合に使用される DM *okay* に関しては、このような形で「是認」の真偽を問うたり否定することは難しいように思える。つまり、DM *okay* の概念性には程度差が存在するということになる。それは一体なぜなのか。この考察に入る前に、DM *okay* が何に対する応答なのかについて考える。

第 2 節で見たように、DM *okay* は通常是認を表す応答詞とみなされている。Aijmer (2002: 102) も、*oh* や *ah* と同様、DM *okay* は応答詞から発展した用法であると述べている。DM *okay* は常に発話の冒頭に生起することからも、基本的に話し手が何らかの情報を受け取り、それに対する直後の反応であると考えられる。Merritt (1984: 140) では、肯定応答 (affirmative response) とみなされる *yes* 項目 (*yes, yeah, yeh, yep, Umh-mm*) と *OK* 項目 (*all right, OK*) について、その違いは、前者が情報要求 (requests for information) に対する応答であるのに対し、後者は行動要求 (requests for action) に対する応答であるとしている。例えば、店で “Do you have lighters?” と聞かれて “Yes.” と答える時、(この店では) ライターを売っているかどうかという情報の要求に対して肯定の返事をしているのに対し、“Can I have lighters?” と聞かれて “Okay.” と答えた場合には、「ライターを売ってくれ」という行動の要求に対して承諾の応答をしているというのである。

Merritt のこの分析は非常に示唆的で、*okay* のさまざまな用法にも援用可能であると考えられる。例えば、第 1 節で見た (1) では、「こぼさないで」という明示的に命令として伝達された行動要求に対して子供たちが承諾の応答をしている。(2) では、「夕飯が出来た」という発話の表出命題から推論を経て復元された「すぐに食卓に来てほしい」という非明示的に伝達された行動要求に対してゾーイが承諾の応答をしている。

しかしながら、(1) (2) のように明らかに行動要求を表す発話ではなくても、発話を通して何かを誰かに伝えるという行為を行う以上、話し手は伝えようとしている情報の理解を聞き手に要求していると考えられる。*okay* はこのような発話意図の理解という相手からの要求に対して承諾を伝えているのである。例えば、(5) では、ハリーの 2 番目の発話を通して伝えられる「一人で眠りたい」という自分の気持ちを理解してほしいというハリーの要求に応じる形で、エリカが *okay* を使用しているのである。

一方で、DM *okay* は、会話の開始、話題の転換、自己奮起などの相手の発話が無い時にも使用される。このような場合はどのような行動要求に応答しているのだろうか。おそらく「ある行為をこのタイミングで行え」というような発話状況からの要請、あるいは話し手の心内に湧き起こった同様の自身への行動要求に応答していると考えられる。そし

て、それらに対して肯定的に応じ、後続発話で行為遂行の意志をはっきり伝えることで次の展開にスムーズにつなげているのである。例えば、(7) の話題転換の例では、もともと「このタクシーを一晩 300 ドルで借り切りたい」と考えていた話し手が、その交渉の話題を運転手にいつ切り出そうかとタイミングを計っていた矢先「今だ」という自らの心内の声をとらえ、それに「分かった」と応答しているのだと考えられる。(8) (17) (18) のような会話の切り出しや終了の例でも同様に、「今このタイミングで話を始めよ (閉じよ)」という発話状況からの要請、あるいは話し手自身の心内の要求に応答している。(9) (16) の自己奮起の場面では、実現困難な問題を抱えた話し手が「大変だけれど頑張ってやってみなさい (やるしかないでしょ)」というような自分の心内の声に対して *okay* で「よし、わかった」と応答している。まとめると、DM *okay* は、相手の発話や発話状況から話し手がその時点で認識した自らへのさまざまな行動要求に対する応答として使用されているのである。

ここで、先ほど述べた DM *okay* の概念性の程度差についての議論に戻る。是認という概念をどの程度有しているかに関しては、何に対して是認の意を示すのかという対象の内実の多寡が大きく関わっていると考えられる。相手の発話が存在する場合には、話し手に向けられた行動要求に関する情報は (ある程度) 明確である。従ってそれに対する是認に関しても概念的な意味が強く感じられる。例えば、(10) では、ケイトが *okay* で理解を示しているのはゾーイの「学校で迎えを待っている自分のことを忘れていた (とても淋しい思いをした)」ということを理解してほしい」というケイトへの要求に対してである。また、(14) でジェーンが *okay* で承諾を示しているのは、「3 週間で望み通りのケーキを作ることはできないということを理解してほしい」というアントワンの要求に対してである。一方で、発話状況などから話し手が認識した行動の要請に関する情報は言語発話のような明確な命題情報に基づかない。つまり真理条件を持たない。同時に、明確な命題情報が存在しない状況で提示された行動要求に対する是認もまた真理条件を有しているとは言い難い。このような違いが DM *okay* が持つ概念性の違いに大きく影響していると考えられる。

最後に、DM *okay* が伝える是認の意そのものにも程度差があることについて述べる。*okay* は常に何らかの行動要求に対する肯定的な応答ではあるが、応答詞の *okay* がほぼ完全な是認を伝える傾向が強いのに対し、DM *okay* は常にそうとは限らない。話題転換や、会話の切り出しや終了、また自己奮起の場合には自らの意志に基づいた行動要求に対する承諾なので、比較的是認の意は強く感じられる。他方、相手の発話が先行する場合には、その行動要求は相手からのものであると同時にその発話内容に賛成や納得はしていないので、是認の意はむしろ弱く感じられるかもしれない。むしろ、相手の思いに対する一定の理解を伝えることで後続発話で導入する発話行為の解釈を促すために用いられているように思える。

基本的には応答詞 *okay* が持つ是認の意に揺れが存在し、それはその基になる形容詞の *okay* の意味が持つ特性と大きく関連していると考ええる。形容詞の *okay* には「容認可能な (acceptable)」などの意味が意味論的に記号化されている。実際の発話で *okay* が使用されると、その好ましさの程度（「適切な (adequate)」、「満足な (satisfactory)」、「可もなく不可もない (mediocre)」など）は、文脈に応じてアドホック概念 (ad hoc concept) として復元される。<sup>7</sup> 例えば、“How is she?” と聞かれて “She’s okay.” と答える場合、通常の会話では *okay* は「元気だ」や「まあ何とかやっている」というような意味に解釈されるだろうが、大きな手術をした後などでは「何とか命はとりとめた」などの意味に解釈されるだろう。つまり、形容詞の *okay* は文脈に応じてさまざまな程度の客観的な肯定の評価に関する命題的（概念的）意味を持つ。単独応答詞の *okay* は、形容詞 *okay* をその構成要素に持ち、頻繁に応答として使用される文発話 “It’s okay.” や “That’s okay.” が短縮されたものと考えられる。従って、単独で生起する応答詞の *okay* もまた、当該文脈の中で受け取った情報に対するさまざまな程度の容認をアドホック概念として伝え、基本的には理解・承諾の合図として聞き手に解釈される。そして、単独応答詞の *okay* に主発話が後続し、さらに DM *okay* として使用されるようになっても「是認」という概念のアドホックな解釈を容認するという性質をそのまま残しているのだと考えられる。

まとめると、DM *okay* は是認という概念的意味を記号化し、その是認は話し手が当該文脈から認識した行動要求に対するものである。また、DM *okay* によって伝達される是認の意は使用文脈の中でさまざまに解釈されるのである。

#### 4.1.2. 手続き的意味

本節では、DM *okay* が記号化していると考えられるもう 1 つの意味を手続き的意味という観点から考察し、その意味の特定を試みる。その前に、まず関連性理論の枠組みで *so* や *after all* のような DM を手続き的意味という概念を使って画期的な分析を行った Blakemore の研究を概説する。<sup>8</sup> (19) を見てみる (Blakemore 2002: 78-79)。

<sup>7</sup> 関連性理論では、発話によって伝達される想定に表意 (explicature) と推意 (implicature) の 2 種類を設定している。前者は発話の論理形式 (logical form) にさまざまな文脈情報を肉付けして復元される。アド・ホック概念構築 (ad hoc concept construction) は、曖昧性除去 (disambiguation)、飽和 (saturation)、自由拡充 (free enrichment) とともに表意の復元のための推論プロセスにおける 4 つの語用論的過程 (pragmatic procedures) の 1 つに数えられている。また、アド・ホック概念とは記号化された概念を基に使用文脈の中で最適の関連性の期待に基づいて構築されるその場限りの概念を指す (詳細は Carston 2002: 322 参照)。

<sup>8</sup> Blakemore は、*so* や *but* のように発話の命題に直接関与しない言語項目を談話連結詞 (discourse connective) と呼び、“expressions that constrain the interpretation of the utterances that contain them by virtue of the inferential connections they express (それらが表出する推論関係によって、それらを含む発話の解釈に制約を課す表現)” (Blakemore 1987: 105) という定義のもとでそれらの手

- (19) a. Tom can open Bill's safe. He knows the combination.  
 b. Tom can open Bill's safe. *So* he knows the combination.  
 c. Tom can open Bill's safe. *After all* he knows the combination.

(19a) では2つの解釈が可能で、「トムがビルの金庫を開けられる」という前半部分と「トムは金庫の組み合わせ番号を知っている」という後半部分によって伝達される意味の関係は曖昧である。一つは、前半が後半から引き出される結論の証拠となっているというもの、もう一つは、前半が後半によって与えられる証拠によって確認されているというものである。一方、それぞれ *so* と *after all* を使った (19b) と (19c) では意味の関係が明らかである。(19b) では、「トムがビルの金庫を開けられる」のは、「トムが金庫の組み合わせ番号を知っている」という結論の証拠だと解釈される。(19c) では、「トムがビルの金庫を開けられる」のは、話し手と聞き手の間で共有されている「トムが金庫の組み合わせ番号を知っている」という想定によって確認されると解釈されるのである。この場合 *so* も *after all* も発話の真理条件に関与せず、ただ聞き手が話し手によって意図された方向で発話を解釈するよう明示的に指示を与えることによって発話解釈の推論プロセスに制約を課している。Blakemore は、*so* と *after all* の手続き的意味を次のように規定している。

- (20) a. “Process the utterance following *so* as an implicated conclusion.”  
 b. “Process the utterance following *after all* as a justification.”

(Blakemore 1987: 77)

つまり、*so* は文脈含意の導入、*after all* は先行想定強化という認知効果を特定し、それにより聞き手の解釈における処理労力を減じることで関連性を有すると Blakemore は分析しているのである (1992: 137-142)。

これらの語と DM *okay* の間には、先行発話や発話時点で入手可能な情報を後続発話の解釈に結び付けているという点で大きな共通点を持っている。DM *okay* の場合は、まず、第3節で見たように反論やさらなる質問や依頼、話題転換など、相手の想定に無い、または簡単には受け入れられそうにないような発話行為を話し手が導入しようとする状況で使用される。そして、そのような中でそれらの発話行為をスムーズに遂行するために、その時点で話し手が認識した何らかの行動要求に対して一定の理解と承諾を示すことで会話の流れを切り、新しい文脈を再構築することで聞き手が後続発話で導入する内容を解釈するように仕向けているのである。<sup>9</sup> 例えば、しぶしぶ同意したり反論を導入したい時には、

\_\_\_\_\_  
 続きの意味を分析している。

<sup>9</sup> 会話の流れやその場の状況を一旦断ち切るという機能は、DM *okay* の全ての事例において見られる。実際に DM *okay* の後に発話自体をやめるように指示する命令文が共起する場合もある。

「自分が言おうとしていることを理解してほしい」という相手の気持ちに対する一定の理解を伝えることにより、相手の心を落ち着かせ、意に反する内容の解釈に聞き手が向かっていきやすい状況を作っている。質問や依頼の際にも、相手の発話意図に対する理解をあらかじめ伝えておくことにより、聞き手が心理的にそれらの発話行為の解釈にスムーズに向かえるようにしている。話題転換や、会話の開始・終了の時には、発話状況の中でそれらの行為を行うことの必要性を感じた話し手が、自らへの行動要求を認識し、それに対する承諾を伝えておくことで、相手に有無を言わせず後続発話の解釈へと向かわせている。自己奮起の場合には、話し手が差し迫った自身への行動要求に対して一応の是認を表明することで、「やりたくない」という気持ちを断ち切り、後続する発話行為に自ら能動的かつ積極的に向かっているという解釈に聞き手を導こうとしている。つまり、相手の発話や当該発話状況から話し手が認識した行動要求に対して一定の是認を伝えるとともに、それによる新しい解釈文脈を作ることで、後続発話を通して伝達する相手にとって想定外の発話行為の解釈が自らが意図した方向で行われるよう聞き手の推論プロセスに制約を課すことで解釈にかかる労力を削減しているのである。

以上の考察に基づき、DM *okay* が意味論的に記号化している意味として (21) を提案する。<sup>10, 11</sup>

(21) DM *okay* に記号化された意味

概念的意味：「P に対するさまざまな程度の是認 (理解・承認)」

手続きの意味：「聞き手は、Q を、(発話時に) 想定に無かった発話行為を伝達するものとして解釈せよ。」

- 
- (i) Jane: Oh, my God. Oh, my God. He gave me flowers. He gave me flowers.  
Casey: **Okay**. Stop it. This is real life. This is not a fantasy. You have to go over there and tell him how you feel. (Movie: *27 Dresses*)
- (ii) Zoe: Who cares how old he is. I mean, he's not my type. He's like a gorgeous wholesome doctor. But he's perfect for you and hot for you, which makes him really perfect.  
Erica: **Okay**. Stop it. He like my work. Not me. (Movie: *Something's Gotta Give*)

<sup>10</sup> Blakemore (1987, 1988, 1992) では、意味論的制約は談話連結詞が導入する発話の解釈において意図される 3 つの認知効果の特定だけが述べられ、文脈への制約はその派生的効果とされた。Blakemore (2002) の *but*, *nevertheless*, *however* の分析においては、後続発話の認知効果を導くための文脈選択への制約により解釈における労力を削減するということまで概念を広げ手続きの意味の精緻化を図っている。

<sup>11</sup> ある言語項目が概念的意味と手続きの意味の両方を記号化する例としては、日本語の「ば」がある (武内 2015: 269-70)。DM *okay* の場合は、概念的意味が先にあり手続きの意味はその概念の上に成立するという意味で 2 次的とも考えられる。これは、内容語としての *okay* が機能語としての役割を確立する過程にあることを示唆しているのかもしれない。

- P: 発話時に（先行発話や発話状況などから）話し手が認識した行動要求  
 Q: DM *okay* に後続する発話

このように、DM *okay* の関連性は、相手の発話を通して伝達される要求や発話状況からの要請に対して一応の是認を伝えること、そして、これから話し手が導入しようとしている発話行為が当該文脈から呼び出し可能な聞き手の想定と異なるという認知効果を特定することで聞き手の発話解釈における推論段階に制約を課すことである。同時に、是認を示すことで一旦会話の流れを切って新たな解釈文脈を作り、後続する主発話で導入されようとしている発話行為は聞き手がその時点で抱いている想定とは異なるという文脈を設定することでQの解釈に要する聞き手の労力を減じることにあると考えられる。

## 4.2. DM *okay* の語用論

DM *okay* に記号化された意味と使用文脈の中で聞き手が入手した情報が相互に作用し、起動性やポライトネスのような機能が語用論的に生じる。本節ではこれらの機能がどのようなメカニズムで導出されるのか、その推論プロセスを明らかにする。

### 4.2.1. DM *okay* の起動性

第1節で見たように、DM *okay* は後続発話によって遂行される発話行為への起動性を持つ。このような後の行為への強い弾みについて Beach (1993: 339) は「準備ができている状態」と表現し、それは *okay* が前述の内容の重要性を決定する上で全くためらわないその潔さのせいだと述べている。しかしながら、この起動性は、会話の切り出しのように「前述の内容」が存在しない時も含め、ほとんどの DM *okay* について見られる特徴である。本稿では、まず、このような DM *okay* の起動性は、それが基本的に行動要求に対する是認の合図であることに起因すると考える。当該文脈の中で話し手が認識した何らかの行動要求に対して *okay* を使って「よし、わかった（そうしよう）」と応じることにより、要求された行動の遂行に対する強い期待が創出される。そのことが、このような *okay* の行動的ニュアンスを生み出しているのである。<sup>12</sup>

<sup>12</sup> この特徴は、なぜ DM *okay* が *let's* 文と頻繁に共起するのも説明できる (Biber et al. 1999: 1118)。(i) の例を見てみる。

(i) Jane: There you are! You look great.

Casey: Thanks!

Jane: *Okay. Let's go. Come on.*

(Movie: 27 Dresses)

(i) は、結婚式に向かう途中で友人のケイシーを見つけたジェーンが「素敵よ」とドレスを誉めケイシーが礼を述べた後、ジェーンが「さあ（結婚式に）行こう」と誘いかける場面である。*let's* 文の前に *okay* を置き、話し手自らが後続発話の遂行への強い決意を示すことが、聞き手の気持ちを動かす大きな推進力となっているのである。

一方で、伝えられる起動力の強さは文脈によってまちまちであると考えられる。DM *okay* の起動力はもともと行動要求に対する是認の合図であることに起因するので、是認の意が強ければ強いほど起動力も強く伝えられる。4.1.1 で見たように話題転換、自己奮起、会話の切り出しや終了のような場合には行動要求自体が自分の意志に基づくものであるから、それに対する是認の意も強く、従って後続する行為の遂行に対する強い起動力が感じられる。一方で、相手の発話を受けての DM *okay* は他者からの要求に対するものであり、かつその内容に話し手は同意・納得していないこともあり、是認の意は弱く、従って後続する行為遂行への起動力は弱く感じられる。

ただし、会話を終了する (18) のような場合、相手はまだ会話が継続するものと思っている可能性があるため、自分の心内に湧き起こった会話終了という行動要求に対しては是認の意は意図的に弱く伝えられ、結果としてそれに向けての起動力も弱く感じられるかもしれない。反対に、(13) のように相手の発話内容についてさらに詳しい情報を得ようと質問する場合には、*okay* を使い相手の発話意図の受け入れを示すことで強い興味を示し、話し手の積極的な姿勢を伝えることで次のステップへの起動力を生み出していると考えられる。このように、DM *okay* の使用によって生まれる後の行為遂行への起動力は、どのような行動要求に対してどの程度の是認を示すか、また後続発話で導入する行為の種類によってさまざまな強さを伴って伝達されるのである。

#### 4.2.2. 配慮表現としての DM *okay*

発話意図を理解してほしいという相手からの行動要求に対して承諾を伝える DM *okay* は、相手への配慮を伝える表現として対人関係的な役割を担うこともある。特に、反論、依頼、質問、会話の終了など相手に負担をかけたり失礼になる恐れのある場合にはポライトネスストラテジーとして有効に利用されるのである。

DM *okay* が伝えるポライトネスは、相手が伝えようとする発話内容やそれに伴う行動要求に対して「是認」を伝えることに大きく起因する。例えば、(11) や (12) のように相手の発話内容に対して十分納得できず反論する際には、相手の「理解してほしい」という気持ちに対してのみ一定の理解を示しておくことが相手への配慮として働いているのである。また、(13) のように相手の発話を受けてさらに質問したり、(14) のように一旦拒絶された後再度依頼をする場合も、相手の言い分に納得はしていないけれども、その気持ちに対する理解と受け入れを示すことで配慮を伝えている。このように、これから行おうとする行為が相手との良好な関係を危険にさらす恐れがあるような文脈では、「理解してほしい」という相手の気持ちに対して一定の是認を伝える DM *okay* は話し手自身の配慮の気持ちを伝え、ひいては後続する自らの発話内容に対する聞き手の解釈や発話行為の遂行

をスムーズに進めるためのデバイスとしても巧みに利用されているのである。<sup>13</sup>

## 5. 結論

本考察により、第1節で示したDM *okay* が持つ4つの特徴について妥当な説明を与えることができる。まず、①のDM *okay* が「必ずしも完全な是認を表していない」のは、DM *okay* は単なる応答詞の *okay* と異なり、是認を伝えるためだけに用いられるわけではなく、後続する自らの発話行為をスムーズに行うための道具としての役割を担っているからである。自分が導入を予定している発話行為がなかなか相手に受け入れられそうにない中で、当該文脈の中で自分に要求されていることに一定の（あるいは形だけの）理解と承諾を伝えておくことは、それらが首尾よく解釈され受け入れられるために一定の効果を持たせよう。このように、コミュニケーション上難しい状況で、さまざまな程度の是認を伝えることで相手との心の駆け引きをしながら自分の意図を達成するために力を発揮するのがDM *okay* なのである。②の「会話の流れを一旦遮断し、新たな展開につなげている」のは、DM *okay* が相手からの要求や発話状況からの要請に是認の意を示すことで、主発話で導入する発話行為が受け入れられるための新たな文脈設定の役割を担っているからである。DM *okay* が導入する発話行為は相手にとって想定外のものであるから、一旦相手の気持ちや周囲の状況への理解を示すことは相手や自分の心を落ち着かせ、余裕をもって次の展開を受け入れるための心理的環境を作り出すことにもつながると考えられる。③の「相手の発話が無い状況でも使用される」のは、DM *okay* がその応答となる行動要求は、相手の発話を通じて伝達されるものだけでなく、当該発話状況（や話し手自身の心内）から認識される場合もあるからである。④の「後続発話で示される行為に対して起動性を持つ」のは、4.2.1で述べたように、相手や発話状況から認識した行動要求に対して是認を示すことで、それらの実現への期待が一気に高まるからである。特に、先行発話や発話状況から入手した話し手自身への行動要求に対してきっぱりと承諾を明言することでその場の流れを断ち切り、自身の積極的かつ前向きな態度を示すことが予定されている次の発話行為遂行への強い弾みになるからである。

さらに本考察により、先行研究で説明できなかった3つの問題点にも妥当な説明を与えることが可能である。まず、相手の発話が無い状況でも *okay* が使用されるのは、DM *okay* の特徴③に対する説明と同様である。また、基本的には是認を表す *okay* が反論や質問

---

<sup>13</sup> DM *okay* にはほとんど中身のない口先だけの是認を表すために使用される場合もある。このような場合のポライトネス機能は、Brown & Levinson (1987: 113-4) がかつて positive politeness の戦略として挙げていた“不一致を避けよ (Avoid disagreement)”の形式的同意 (Token agreement) ようなものと考えられるかもしれない。

の際に矛盾せず用いられるのは、DM *okay* は相手の発話の命題内容に対して同意や納得を伝えるための応答ではなく、相手の「発話意図を理解してほしい」という要求に対して理解・承諾する合図だからである。*okay* が行動要求に対する応答だとする本考察は発話の末尾に付加疑問的に上昇イントネーションを伴って使用される *okay* の機能との整合性も説明できる。(22) (23) を見てみる。

(22) Erin: Don't talk to me like I'm an idiot, *okay*. (Movie: *Erin Brochovich*)

(23) Andy: I didn't have a choice, *okay*? (Movie: *The Devil Wears Prada*)

(22) では、「馬鹿にしたような言い方はしないで」という命令の後、その行動要求に対する相手の理解・承諾を確認するために *okay* が用いられている。(23) では、「そうするしかなかったの」という発話を通してその内容やそう言うことしかできない自分の思いを相手が理解してくれるよう要求し、それに対して理解・承諾の確認をするために *okay* が用いられている。これらの例では、相手のではなく自分の発話内容や思いに対して聞き手に理解と承諾を要求しているので、その結果相手が“*Okay!*”と応答し、その要求への承諾を伝えることもある。このように主発話と共起する *okay* は、文頭に来ても文尾に来て、やはり何らかの行動要求とそれに対する理解・承諾が関連していると考えられる。最後に、*okay* が「次のステップへの準備」となるような起動力を持つのは、上記特徴④の説明で述べた通りである。

本稿では、会話の中で頻繁に使用される DM *okay* の機能的意味について関連性理論の枠組みを用い、意味論と語用論の両方の観点から理論的かつ包括的な考察を試みた。それにより、さまざまな談話の節目で用いられる DM *okay* の用法に関して統一的かつ妥当な説明が可能であること、また、単なる応答詞の *okay* に無いさまざまな特徴を何故 DM *okay* が持つのかを示した。さらに、これらを明らかにすることにより、先行研究で説明できなかった3つの問題点についても説明が可能であることを示した。*okay* と（言語使用域における差異を除いて）ほぼ同義であるとされる *all right* の DM 機能における違いや DM *okay* のイントネーションにおける意味的差異などについては今後の課題とした。<sup>14</sup>

<sup>14</sup> *all right* については、*okay* より頻度は少ないものの、ほぼ同じ談話の節目で現れ、同様の機能を持つと考えられる。大きな違いは、*all right* は「自己奮起に用いられることが少ないことである。おそらく、この場合は苦境にある話し手が「よし」と自分自身に言い聞かせるのであるから、より正式度 (formality) の高い *all right* を使う必要がないからだと考えられる。

## 参照文献

- Aijmer, K. 2002. *English Discourse Particles—Evidence from a Corpus*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Beach, W. A. 1993. “Transitional Regularities for ‘Casual’ ‘Okay’ Usages.” *Journal of Pragmatics* 19, 325–352.
- Biber, D. et. al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Pearson Education Limited.
- Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- Blakemore, D. 1988. “‘So’ as a Constraint on Relevance.” In Kempson (ed.), *Mental Representation: The Interface between Language and Reality*, 183–195. CUP.
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell.
- Blakemore, D. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning: The Semantics and Pragmatics of Discourse Markers*. CUP.
- Brown, P. and S. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. CUP.
- Jucker, A. and S. W. Smith. 1998. “Discourse Markers as Negotiating Strategies.” In: A. H. Jucker and Y. Ziv, eds. *Discourse Markers*, 171–202. Amsterdam: John Benjamin Publishing Company.
- Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances—The Pragmatics of Explicit Communication*. London: Blackwell Publishing.
- Merritt, M. 1984. “On the Use of ‘O.K.’ in Service Encounters.” In: James Baugh and Joel Scherzer (eds.) *Language in Use*, 139–147. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- 松尾 文子, 廣瀬 浩三, 西川 真由美. 2015. 『英語談話標識用法辞典—43の基本ディスコース・マーカ―』東京: 研究社.
- 西川 真由美. 2013. 「談話標識 *okay* の機能的意味」、『日本語用論学会第 16 回大会発表論文集』第 9 号、121–128. 日本語用論学会.
- Schourup, L. 1999. “Discourse Markers.” *Lingua* 107, 227–265.
- Schourup and 和井田. 1987. *English Connectives*. 東京: くろしお出版.
- Sperber and Wilson. 1986/1995. *Relevance-Communication and Cognition*. London: Blackwell.
- Wilson and Sperber. 1993. “Linguistic Form and Relevance.” *Lingua* 90, 1–25.
- Swan, M. 2016. *Practical English Usage* (fourth edition). OUP.
- 武内 道子. 2015. 『手続き的意味論』東京: ひつじ書房.
- 内田 聖二. 1985. 「隣接句と談話辞」、『奈良女子大学文学部研究年報』第 29 号、23–46.
- 英英辞書など
- Longman Dictionary of Contemporary English 6 (LDOCE6)*. 2014. Edinburgh Gate: Pearson Education Limited.
- Oxford Advanced Learner’s Dictionary of Current English 9 (OALD9)*. 2015. OUP.

## DVD・映画台本

“*No reservations*” DVD. 2007. Castle Rock Entertainment.

Screenplay Corporation. 2000. *Erin Brockovich*. Screenplay Publishing Co., Ltd.

“*Something’s Gotta Give*” DVD. 2003. Warner Brothers Pictures and Columbia Pictures.

Screenplay Corporation. 2009. *27 Dresses*. Screenplay Publishing Co., Ltd.

Screenplay Corporation. 2009. *The Devil Wears Prada*. Screenplay Publishing Co., Ltd.

Screenplay Corporation. 2008. *The Night Museum*. Screenplay Publishing Co., Ltd.

“*Notting Hill*” DVD. 1998. Poly Gram Filmed Entertainment.